　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　川崎支部支部長　山岸一雄　（執筆：河合・山岸））

**川崎支部便り　第36号　（2021年1月）**  
**オープンで各自が主役：川崎支部**

人生を豊かに（雑学のすすめ）

　ノーベル文学賞候補の作家村上春樹氏が、読者からの質問メールに答えています。「親切心が極意です」

（質問）病院で広報を担当しています。しかしなかなか思いが伝わらないことが多いです。村上さんが相手にメッセージを伝える時に意識していることは何ですか。　（回答）親切心です。それ以外にありません。親切心をフルに使ってください。それが文章を書く極意です。おもねるのではなく、親切になるのです。

川 崎 点 描 ： 川崎支部活動拠点

　【**（日本の一年間の最後の月、12月の話題のワードは？）②**】

昨年の年末は、新型コロナウイルスの感染者の多くが日本も、世界的にも発生し、経済的に影響を受けた企業が多く、長い日本の賞与の歴史に多大な影響が出たり、賃金にも未払い、又失業の方々も出ました。早期の新型コロナウイルスの収束を日本政府に期待し、日本の経済の回復を願い、失業者も無く、

安定した給与・賞与の復活を願っています。

日本では賞与として定期給の労働者に対し、定期給とは別に支払われる給料の事で、ボーナスともいわれます。欧米では特別配当・報奨金の事で、会社への勤め人、サラリーマンとして十分お判りの事です。会社の業績や世の中の景気によっても支給額の変化が有りました。しかし、私もサラリーマンの一人として、給与以外でのボーナスの金額も織り込んで、買い物の計画を立てたものでした。

この毎月発行の川崎支部便りの読者には、現役でご活躍の方は頑張って多く支給される様、業績向上に努力して頂きたいし、年金生活者は賞与・ボーナスの名称は懐かしく思い出すでしょう。私は賞与・ボーナスは基本的に夏と冬の年2回の支給でしたが、企業によっては年1回とか３回もあった様で、外資系企業のばあいは月額が多く、賞与・ボーナスを導入していない場合も有ります。

さて、日本の賞与支給の歴史は、古くは江戸時代（時期は不明ですが、江戸時代中期から末期と想像）に商人がお盆（夏季）と年末に乗せて、年末に奉公人に配った「仕着（しきせ）」が由来と云われています。主人が使用人にその季節の衣服を与えたこと、またはその衣服を指します。普通は盆と暮れの二度です。また、江戸時代の幕府が諸役人に衣服を与えたことで、その衣服を「御仕着（おしきせ）」と言いました。奉公人への場合、夏は氷代、冬は餅代の事もあり、この支給は現金支給と思います。

賞与の最古の記録では、1876年(明治9年)の三菱商会の例が有るそうです。また、江戸時代に近江商人の西川家が賞与を年2回与えていた記録が有る様です。当初の日本は欧米のシステムと大差のないシステムであった様ですが、第2次世界大戦後のインフレーションで労働運動が高まり、生活への出費がかさむ夏と冬に生活保護的な「一時金」としての性格を帯びる様になり、支給1回につき月給の0.5月か月から3か月分が支払われる様になったそうです。多くても0.5か月から1か月分と言われている欧米の賞与（支給されないことも多い）に比べると、日本は欧米よりも多く賞与が出ています。今後も賞与の支給は、生計の大切なものなので、継続してもらいたいと思います。

〇年末から年始への「年賀状」の歴史的な話題です。

日本での年賀状は、平安時代から始まったとされています。平安時代中期に貴族・儒学者・文人の藤原明衡（あきひら）（989年？～1066年）がまとめた手紙の文例集の中に、年始の挨拶の文例があり、これが残存している最も古い例と言われています。この頃からお世話になった方や親族に、新年の挨拶をして回る「年始回り」という習慣が広まり、現代でも企業同士で年末年始の挨拶をし、「手拭い」とか「タオル」をもって、年末年始の挨拶、年賀と書いたものや、「謹賀新年」と刷り込んだ名刺を持って挨拶をしていますが、長い歴史があったのですね。

平安時代でも挨拶に手紙を使用するのは一部の貴族で、直接会えない様な遠方の方へ賀状を送っていたそうです。この習慣が平安・鎌倉・室町・安土桃山の各時代に行われていました。江戸時代になると、現在の郵便の先駆けとなる「飛脚」が充実し、庶民が手紙で挨拶を済ませることも増えた様です。この頃は更に「名刺受」を玄関に設置して、不在時には新年の挨拶を書いた名刺を入れる文化もあったそうですが、庶民達はなくて武士や大店にはあったと思います。

現代の様なはがき型になったのは、1873年（明治6年）に官製はがきが登場したことがきっかけでした。そして明治20年前後には年賀状を出すことが年始の恒例行事になったそうです。

多くの人達が1月1日の消印をもらうため、年末の郵便局の仕事量が普段の何十倍にも跳ね上がったため、その対策として「年賀郵便」の特別取扱いが始まったのです。その後、1949年（昭和24年）に一民間人の林正治氏のアイデアで「お年玉付き年賀はがき」が登場しました。

そもそも年賀状を出す目的は、①お世話になった方や大切な方、親族への「年始回り」の代わり②お世話になった方に感謝の気持ちを伝える③普段会わない人と連絡が取れる④友人だけでなく、親族や仕事関係の人に出すことで、お互いの信頼関係を高められる、等々が有ります。

現代はパソコン・スマホ等が発達し、年賀状を1枚ずつ書くよりも機械化が進むことで、賀状はどんどん減少していくのではないかと思います。残念ながら日本の伝統文化が少しずつ消えていくと思います。

以上、日本の最後の月、12月に毎年思い浮かぶワード「師走」「クリスマス」「ボーナス」「年賀状」をご紹介しました。人によっては他のワードもあると思いますが、今まで安易に使っていたワードも調べていくうちにそれぞれの歴史があり、新しい発見に出会えます。

（上記出典：Yahoo Japan）

支部の活動

①2020.11.14（土）はミステリーツアー（13時に用賀駅北口地上部のバス乗場前集合）（済）

②2021.02.27（土）は第1回講演会「地域の歴史、再発見！幻の奥沢線」（14時から夢キャンパス）

③2021.03.27（土）はお花見（予定）　JR南武線　津田山駅　徒歩8分の噴水前（お弁当付き）

ご存じですか

【ヒツジのメェ―メェ―はなぜ必要か】

 ヒツジの母親は、赤ん坊がメエーメエーという声を出しているのを聞き続けていないと、世話行動を維持しないそうです。この事実の為に、長谷川眞理子氏（現総合研究大学院大学学長・教授－夫は東京大学名誉教授）が、北海の孤島、セントキルダ島で野生ヒツジの研究をしていました。生まれた子ヒツジ達がどの様に成長していくかを計測する研究で、定期的に子ヒツジを捕まえて体重を測定しました。なにしろ野生のヒツジなので、子ヒツジを捕まえるのも大変ですが、こちらの作業に怯えて遠くに行った母親の注意をつなぎとめるのも、大変な作業でした。

子ヒツジを捕まえられた母親は、やがて歩き去ります。こちらはその間に、子ヒツジの血液を採取し、体重を測定し、耳に識別のタグ付けは２人１組で行います。1人は勿論、この様な作業をしますが、もう1人は、双眼鏡で母親の動きを見ながら、子ヒツジの鳴き声をまねて声を限りにメエ―メエーと叫び続けるのです。そうしないと母親は、自分の子供が死んだと思い、子育てを止めるので、作業を終わって放しても、受け入れないことがあるのです。放した子ヒツジが走っていくのを双眼鏡で追い、母親と一緒になって再び乳を吸い始めるのを確認すると、ほっとしたそうです。

生き物をめぐる4つの「なぜ」（長谷川眞理子）から。

 　次号もお楽しみに。

皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。（連絡先：[k\_yamagishi@6kou.co.jp](mailto:k_yamagishi@6kou.co.jp) 山岸宛）